

第40回 こうへ市民文芸

俳句部門

秋空の舟とし漕がむ車椅子

升田 ヤス子

選評

山田 六 甲

車椅子は「百科事典」によると「移動する能力に困難が生じた際に、それらの機能を補う目的で使用される福祉用具」を秋の澄んだ「天空の舟」に見立てて、その空を飛ばせるといふ発想が見事。車椅子の本人かそれを押す家族か入院中の人が看護師かなどの夢想を五七五に呼び込んだ「秋空の舟」との飛躍に感銘。飛ばせてあげたいのか飛びたいのだ。秋の澄んだ上空を・飛んでいるE.Tのような車椅子を想像するだけでも楽しい車椅子を使っている人の発想であろうか。このまま空を自由に飛べることできたら、どんなに楽しいことか、と空想を巡らせているのだろうか。

空になき地震の傷跡星月夜

中谷明子

選評

今井 豊

三十年前神戸の町は瓦礫と化した。阪神大震災である。地上は瓦礫の山、焼土と化している。しかし、そんな地上から夜空を見上げるといつもと変わらぬ様子。その落差に驚きながらも、復興の志を以て星月夜を見上げる作者。自然の脅威におののきながらも、負けずに立ち向かっていこうとする気持ちが伝わってくる。「地震」は「ない」と読む。

切干の日のかたまりを水に浸く

荒牧 美智子

選評

山田 六 甲

切り干し大根のことで薄く切ったり細く切ったりして乾燥した保存食で冬の季題。

大根はザルや筥むしろに広げて乾燥させる。乾燥のとき太陽の光（恵み）を一杯吸ってうまみも凝縮させる。「日のかたまり」というのが眼目。それを水で戻して調理するが、調理の時間がかかる分だけうまみも増す。

寒暁のひかり波より波間より

石崎智紀

選評

今井 豊

冬の夜明けの光りが海から射してくる。この句が詠まれたのが神戸だとすると、『源氏物語』や『平家物語』の世界、大輪田泊や湊川の戦いなど、さまざまな歴史的な背景も踏まえられている。朝の光が波より射してくると思った次の瞬間、波間からも日が射している。眩しく、魅惑的な朝日の神秘性。「波より波間より」と繰り返される韻律に引き込まれていく。

どの坂を下りても海や大西日

小中命子

選評

山田 六甲

西日は夏七月の季語。真夏の太陽は西に傾いてもなお烈しくじりじりと灼けて暑い。神戸の人はこの句から、思い当たる坂が何処なのだろうと思いを巡らし知っている坂に当てはめる。西日が早く海に沈んでくれないかと思うのは「おくのほそみち」で松尾芭蕉が詠んだ「熱き日を海に入れたり最上川」西日の照り返しにうんざりとしながらもこの町がすきなことから、暑いといつて逃げ出すことを考えない。

ちちろ鳴くはすかい座り二人膳

清田 しおり

選評

山田 六甲

ちちろとはこおろぎのことで秋の初めから晩秋まで鳴く秋の代表的な虫。特にエンマコオロギの鳴き声を聞くと秋を強く感じさせ、過鑑賞だが「きりぎすは／羽で鳴くかよ／蝉や腹で鳴く／わたしや／あなたの胸で。」と新土佐節は高知の唄。剛毅木訥のいごつそう男に、しつかり者の、八金女はちきんには、似合わない歌詞のようだが、人恋う季節感の中に「はすかい座り」は物語風。

神戸芸術文化会議賞

冬菊や机に残る地震の疵

平尾 美智男

選評

今井 豊

これも地震の句。学校の教室を思い浮かべたが、個人の机であってもまったく差し支えない。机に三十年前の阪神大震災の疵が残っている。今ではもう黒くなり、疵のところもまるみが付いている。でもまだ、児童生徒が使い続けている。震災当時、この机を使っていた生徒はどうなったのだろうか。生きていたら四十代だろうか。冬菊が匂っている。

震災関連特別賞

寒茜吾子の遺したランドセル

大西月子

選評

今井 豊

阪神大震災で亡くなった吾子。いまだに捨てられないランドセル。この子が生きていたら、どんな人生を歩んだのだろう。どうしても考えてしまう。親（もしくは両親）は死ぬまでこのランドセルを捨てることはないだろう。吾子の形見としていつも身近に置いておくことだろう。「寒茜」が三十年前の震災を克明に甦らせてくれる。